

教員養成課程における小学校家庭科の教授法に関する探索的検討

— 計量テキスト分析をふまえて —

札幌学院大学 人文学部 こども発達学科 浅沼 裕治

1. はじめに

現代の日本において、小学校家庭科教育に関する研究・実践は多角的かつ重層的に蓄積がなされており、学校現場においてどのような教授法が児童に有効であるのかについて、一定のコンセンサスが形成されていることに異論のある人はいないだろう。

実際のところ先行研究を概観するに、小学校家庭科に関する教授法についても、理論的側面からの考察に加え、その理論をいかに現場の教育実践にいかせるかが考察され、実験的授業の実践をふまえた考察まで幅の広がりが見られる。そのなかで、とりわけ近年の小学校家庭科教育におけるキーワードも「課題解決力」・「協働」・「SDGs」などのタームが散見されている（伊藤 他 2023、杉村 他 2023、川田 他 2023）。

このようなことは『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 家庭編』における、家庭科の目標においても、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」（文部科学省2018：12）、として、以下の3点を提示している。

- (1) 家族や家庭、衣食住、消費や環境などについて、日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。
- (2) 日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う。
- (3) 家庭生活を大切にすることを育み、家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う（文部科学省2018：12）。

本稿は、文部科学省が掲げるこれらの家庭科教育における目標に対応するべく、先にあげたような「課題解決力」や「協働」といったタームに関する具体的な意味や教育実践方法とはいったいどのようなものなのかを問題意識として考察を行う。近年、模索されているこうした言説・実践的含意がどこに／何を指し示すものなのかを先行研究から考察することにより、小学校家庭科教育の有効な教授法を考察することを目的とする。

本稿ではまず、次節で対象とする文献について検討を加え、続く節において対象とする先行研究の分析方法を検討する。次に分析から得られた知見をもとに小学校家庭科教育における教授法において目指されている事柄について概観・考察を行う。

2. 検討文献

先にも少しふれたように、小学校家庭科に関する研究は多くの蓄積がみられる。2023年10月現在、CiNiiで「家庭科 小学校」と検索を入れると3,000件あまりの文献が該当する。それらを仔細に論じることは紙幅の関係もあり困難であるが、とりわけ近年に刊行され、かつ、文部科学省が示す家庭科教育の目標である「課題解決力」、「協働」、「SDGs」についてダイレクトに考察された論文として、伊藤 他（2023）、川田 他（2023）、杉村 他（2023）（以下、筆頭執筆者のみを記載する）を挙げることができる。

これらの論考は、文部科学省が提示する目標の内容すべてを包含し考察がされたものではないが、いずれも近年の家庭科を含めた小学校教育に要請されている要素を取り入れ考察がなされた研究であり、本稿が設定する教員養成課程における小学校家庭科の教授法を考察するうえで極めて深い示唆に富んだ論考であることから、この3編のテキストの内容を分析・考察の対象とする。

3. 分析方法

内容を分析するにあたり、その方法をテキストマイニングによる計量テキスト分析を行う。テキスト分析のためのソフトウェアは樋口耕一らが開発したKHcoder (Version : 3.Beta.07e) を用いる (樋口 2021)。

計量テキスト分析とは、浜崎ら (2017) が述べているように、テキストデータの中から自動的に語りを抽出し、統計手法を用いて探索的な分析を行うもので、それによって語の出現パターンやルール、ひいては新しい知識の発見を目指すことができ、質的データをコーディングによって数値化し、計量的分析手法を適用してデータを整理、分析、理解する方法である (浜崎 2017 : 87)。分析者側の「規範」や「想い」を基底とした恣意的な分析を排除し、客観的にテキストの内容を描き出すうえで有用なツールということができ、本稿の問題意識における目的を達成するために有効な方法である (浅沼 2018 : 3)。

4-1. 結果—jaccard係数および共起ネットワーク

まず、伊藤 (2023)、川田 (2023)、杉村 (2023) においてKHcoderにて析出したjaccard係数を示す (表1)。

表1. jaccard係数

伊藤 (2023)		川田 (2023)		杉村 (2023)	
解決	.107	教科	.100	整頓	.075
課題	.089	家庭科	.089	整理	.070
方法	.076	授業	.077	ポイント	.054
設定	.073	目標	.075	教える	.044
生活	.060	内容	.073	考える	.039
問題	.049	教材	.069	作品	.037
原因	.044	研究	.068	小物	.035
快適	.042	課題	.062	自分	.035
考える	.042	学生	.057	作る	.034
住まい	.040	学習	.057	設定	.031

伊藤 (2023) では、「解決」、「課題」、「方法」といった語が、関連性があるものとしてあがっている。KWICコンコーダンスにおいては、「解決方法を多面的・多角的に問い直す」、「解決方法について様々な立場から多角的に問い直す」など、家庭科の学習において児童たちがたてた課題を解決する力 (課題解決力) を養うため「生活の課題発見→解決方法の検討と計画→課題解決に向けた実践活動→実践活動の評価・改善→家庭・地域での実践という一連の学習過程を大切にし」、「題材の中でどのような指導を行えば、児童の課題解決力がより高まっていくのか」が考察されている (伊藤 2023 : 53)。

伊藤 (2023) における、各語の関連については、共起ネットワーク (図1) に示すように、課題の解決方法を考える際に、「多面的」、「多角的」な視点で取り組むことが目指されている。

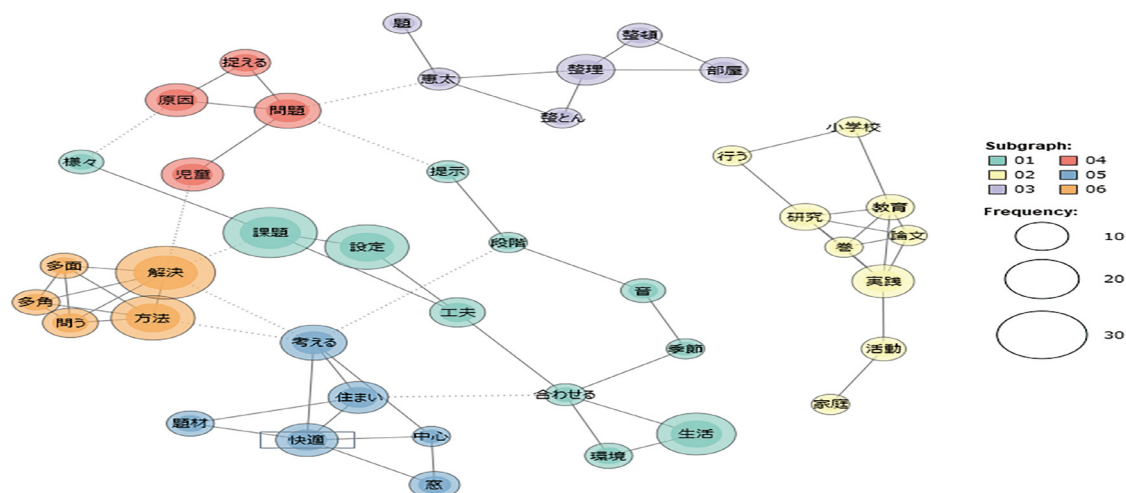


図1. 伊藤 (2023) 共起ネットワーク

そして、この研究の成果として、①くらしの中から表出された問題の原因も捉えた上で課題を設定させることで、より自分のくらしに適した課題設定を行えるようになる。②自分が考えた解決方法を段階を踏んで多面的・多角的に問い直すことで、よりよい生活を創り続けることができるようになる（伊藤 2023：57）ことが求められるとまとめている。

川田（2023）においては、「教科」、「家庭科」、「授業」といった語が、関連性の高い語としてあがっている（表1）。KWICコンコーダンスにおいては、家庭科の学習は、「他教科と関連させながら深めたりすることに成果が認められ、児童が生活と関連付けて自分ごととして捉えることにつながると推察される」、「学校教育の現場においてはカリキュラム・マネジメントが重視されており教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成が求められている」といった記述がみられる（川田 2023）。図2の共起ネットワークで示されるように、家庭科の教授法を考察するにおいても、「家庭科の他分野および他教科の学習内容と関連付けた授業を構想する必要があること」（川田 2023：24）と横断の必要性が強調される。

これらの著述に述べられているように、家庭科の指導においても、当該科目の独自性を活かしつつ他教科の関連性を視野に入れ教授することが求められている。

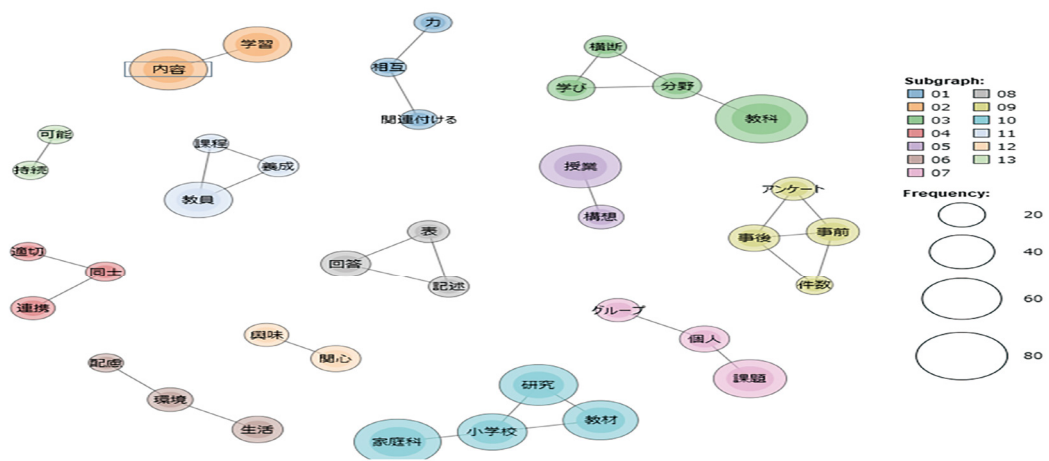


図2. 川田（2023）共起ネットワーク

杉村（2023）では、「整頓」、「整理」、「ポイント」といった語が関連性の高い語としてあがっている（表1）。

「整理・整頓」を題材とした授業案の考察がなされている論文であり、こうした語が上位に位置するものと思われる。jaccard係数にはあがってきていないが、杉村（2023）では、「協働」という語がキーワードとして多用されており、「協働的に学ぶためには、複数の主体が目標を共有し、共に活動することが大切であるが、一方で、児童一人一人の力で考えながらソーイングの技能を身につけることや、集中して物事を考えることも大切である」（杉村 2023：246）と述べ、近年の家庭科教育の柱である「協働」への取り組みがいかにして可能であるのかが考察されている。

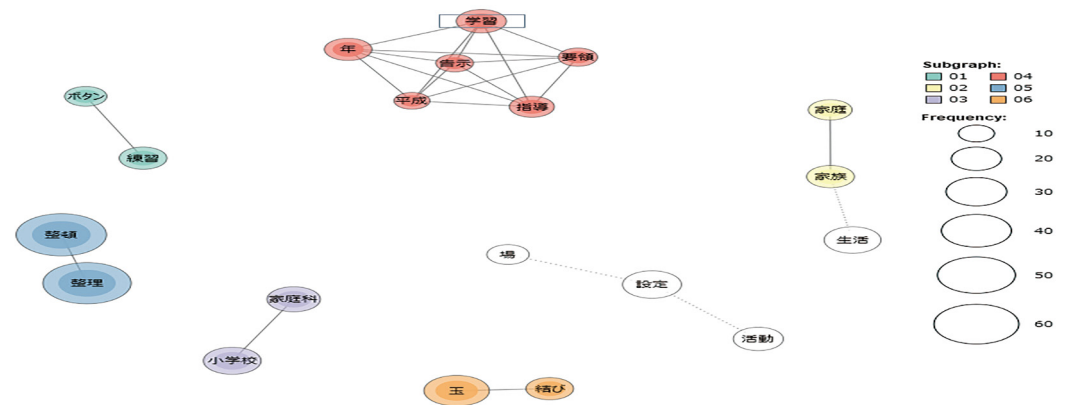


図3. 杉村（2023）共起ネットワーク

4-2. 結果—対応分析—

本稿で取り上げている各論文を変数として、対応分析を行ったものが図4である。各論文に共通してみられる語は「小学校」、「指導」、「学び」、「取り組む」といった語である。

それぞれの論文に特徴的な語として、伊藤（2023）では、家庭科教育を通して、問題の解決方法を各児童が主体的に導き出すように指導を行うことが要請されている点に特徴がみられる。

また、川田（2023）では「教材研究の具体的な手法として、教材そのものへの理解を深めるとともに、教科書や学習指導要領等の内容を確認したうえで、家庭科の他分野および他教科の学習内容と関連付けた授業を構想する必要がある」（川田 2023：24）と述べ、家庭科という教科の特性を活かした教授法の考察が述べられている。

杉村（2023）では、jaccard係数でも上位にあがっている「整頓」や「教える」、「意欲」といった語が特徴的なものとして析出されている。

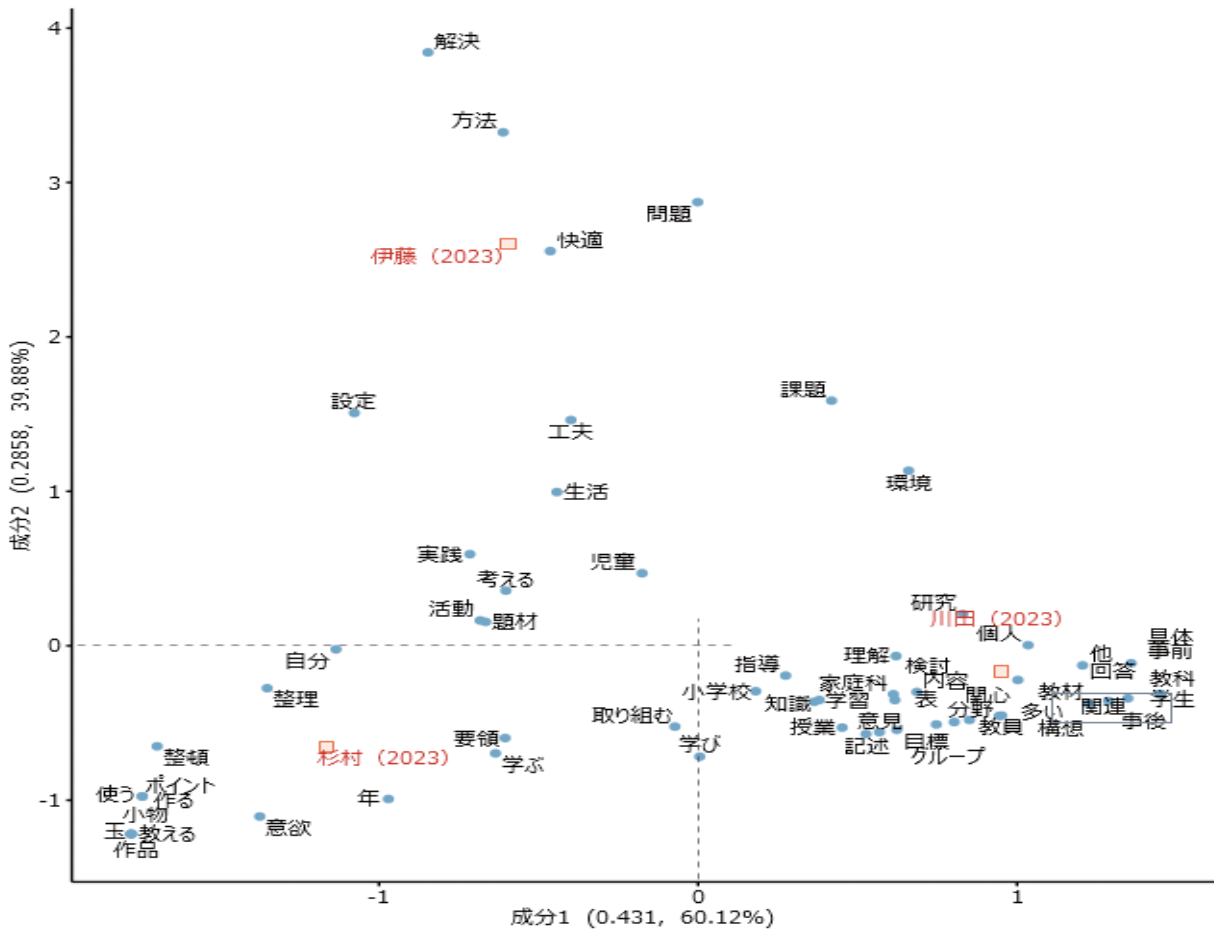


図4. 対応分析

5. 考察

本稿では、教員養成課程における小学校家庭科の教授法に関する探索的検討として、先行研究の言説を計量テキスト分析により考察を行った。これにより、以下の知見が示唆された。

近年の小学校家庭科教育に要請されている「課題解決力」、「協働」といった語をキーワードとして、それを現場での教育実践にいかにして取り込んでいくかが考察されている。3つの文献を同期させた共起ネットワーク図においても、小学校家庭科の科目において、いかに子どもたちが学習の内容を理解し、それを具体的な生活のイメージを膨らませながら工夫を凝らし、他者と協働して学びを深めることができるか、ということに主眼がおかれているということが出来る（図5）。

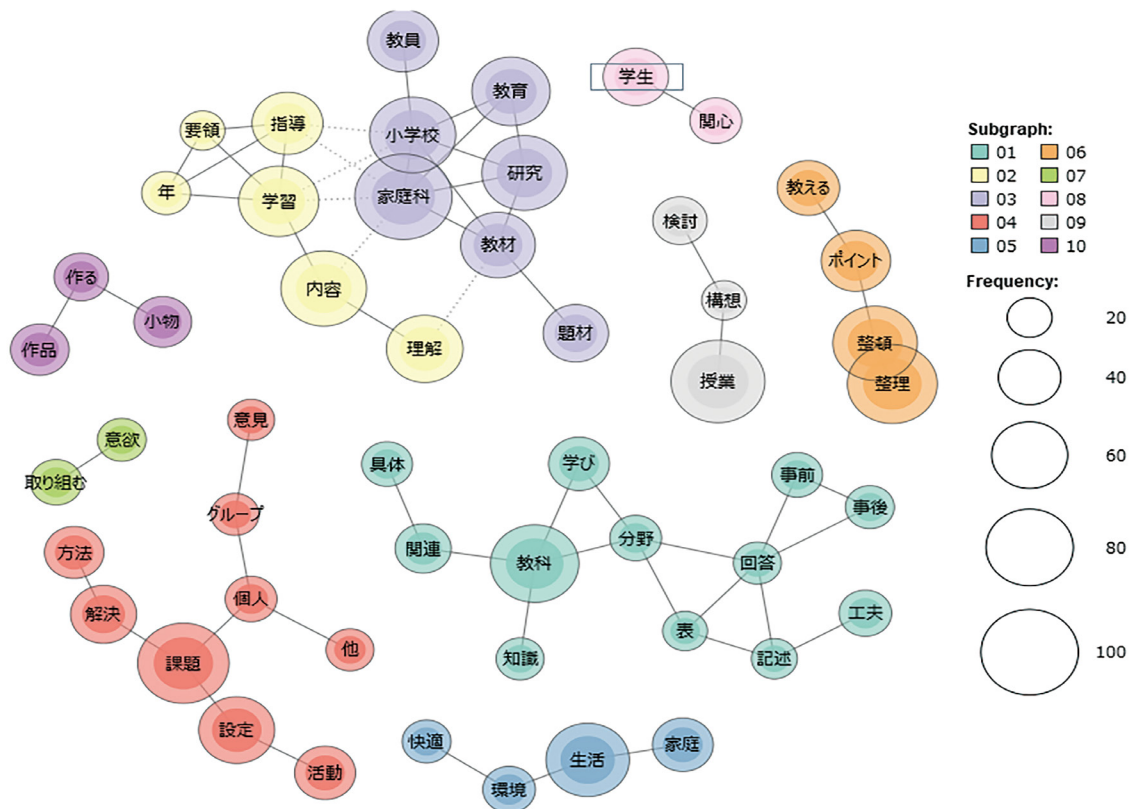


図 5. 共起ネットワーク (伊藤 2023、川田 2023、杉村 2023)

6. まとめ

小学校家庭科では「家族・家庭生活」、「衣食住の生活」、「消費生活・環境」の分野が設定されている。そのどれもが、子どもたちの日常生活に直結するものであり、かつ、社会や子ども自身の成長とともに大きく変化・変容するものである。そのために、例えば家族・家庭生活に対する価値観も、時代とともに変化するものであり、グローバル化が進展するなかで多様な価値観を持つ人々との共生がますます要請されることになるだろう。そうしたときに当該科目の知識が単に日常生活を送るためだけの個人の知識にとどまることなく、いかにして他者との真の意味での「協働」を行うことができる礎となる力を彫琢することができるかが、現代の家庭科教育に求められているということがいえるだろう。

引用文献

- [1] 浅沼裕治 (2018). 子どもの性別・発達段階で異なる父子家庭の父親の家族ケアの困難性(I)－6名の父親の語りにおける計量テキスト分析をふまえて－, 中京学院大学短期大学部研究紀要, 48(2), 1-13.
- [2] 伊藤雅子・添田きり・川村めぐみ (2023). 小学校家庭科における課題解決力を高める指導の在り方—課題設定の工夫と解決方法を多面的・多角的に問い直す—, 教育実践研究論文集, 10, 53-57.
- [3] 川田菜穂子・都甲由紀子・財津庸子・長野優 (2023). 教員養成課程における小学校家庭科の教材研究指導の試み—SDGs (持続可能な開発目標) を題材として—, 大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 40, 15-27.
- [4] 杉村桃子・菊地志帆 (2023). 小学校家庭科における「協働」に関する教育内容の検討 (第2報) —授業案の構想—, 新潟大学教育学部研究紀要, 15(2), 239-246.
- [5] 浜崎隆司・黒田みゆき (2017). 絵本の読み聞かせがその後の人生に及ぼす影響, 鳴門教育大学研究紀要, 32.
- [6] 樋口耕一 (2021). 社会調査のための計量テキスト分析 第2版, ナカニシヤ出版, 京都.
- [7] 文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領解説 家庭編, 東洋館出版社, 東京.